



市政だより

# 太宰府

NO. 412

S63

10.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の 文化財

41

### 木造盧舎那仏坐像

(重要文化財)

像高百四十九センチ 檜の寄木造  
平安時代後期 戒壇院

戒壇院本堂奥に静かに坐す仏です。盧舎那仏は毘盧舎那如来ともいい、「光明遍照」つまり太陽の光輝くごとく全宇宙を支配する仏と言われています。よく知られているところでは奈良の東大寺の大仏さまがこの盧舎那仏です。

戒壇院のこの仏様は、檜材の寄木造で、穏やかな顔だち、細かく美しい衣の線など、平安時代も最末期ごろの作と考えられています。なお、光背は江戸時代の初めに新しく造り直されたものです。

ところで戒壇院は奈良時代、僧尼として守るべき戒律を授ける所(資格認定試験所)として全国に三カ所だけ置かれた戒壇の一つです。その時は観世音寺に所属していたのですが、江戸時代にわかれて、今は禅宗の寺です。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財

(42)

### 北野天神縁起絵巻 三巻

(県指定文化財)

紙本着色 卷子装 江戸時代

太宰府天満宮蔵

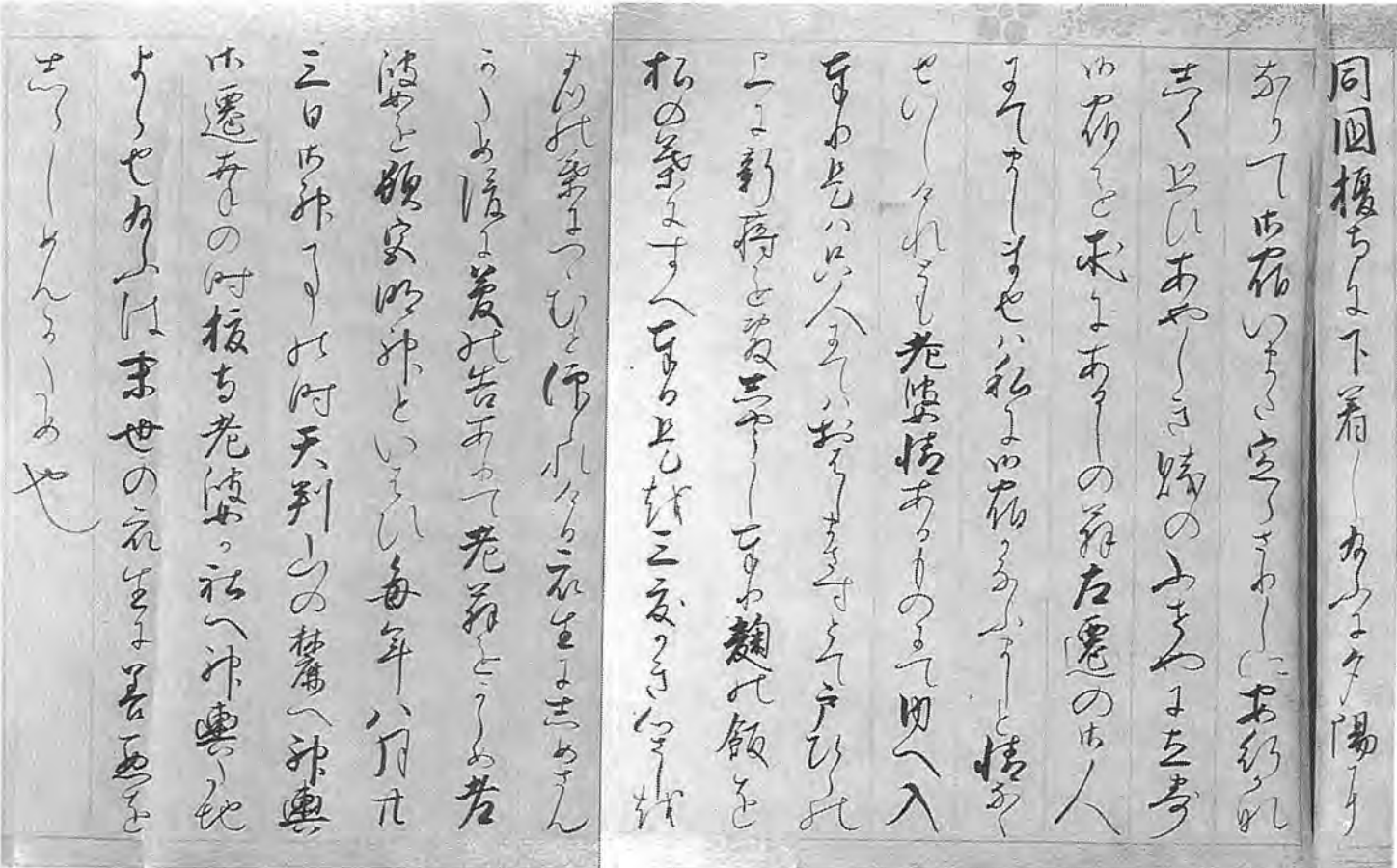
寺社の由来や靈験などを言い伝えたものを縁起といいますが、中でも菅原道真の生涯と道真が大宰府に死んでのち怨霊となつて都の人々を恐れさせその霊を鎮めるために京都北野に天神社を造営した経緯、そしてその靈験を伝える天神縁起は、各地に広まり、その数が多いことでも有名です。

この天満宮に伝わる縁起絵巻は江戸時代の初めの元和五年(一六一九)に、筑前藩主黒田長政の所望により、光信本北野天神縁起絵巻を手本に作られました。詞書は北野天満宮徳勝院の法印禅昌が、絵は土佐派の画工が描いており、彩色は鮮やかで、全巻にわたつて余白や地面の部分に金銀の切箔を時き敷いて豪華なものです。

なお、この絵巻は九州では最も古い天神縁起であり、天満宮には他に嘉永二年(一八四九)の年記をもつ縁起絵巻三巻と、字だけの元禄六年製天満宮縁起三巻(重文)とがあります。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



上巻第28段、大宰府に着いて宿もない道真公に、榎寺の老婆が松葉に麴飯を盛って差し上げお世話をした。後にその老婆は頓宮明神として祀られ神幸式の際には神輿が立寄るという話を述べている。この麴飯の話が、梅ヶ枝餅のいわれのもとになった伝説ではないかといわれる。

## 太宰府の文化財 ④

天満宮縁起 三卷 (重要文化財)  
紙本墨書卷子装 江戸時代 太宰府天満宮蔵

先月号に掲載の縁起絵巻や、各地の天満宮に流布している北野天神縁起とは全く系統の異なる天神縁起です。

それは太宰府天満宮の側から書かれた内容で太宰府天満宮を中心として、その草創の経緯や、博多綱敷天神、水鏡天神、針摺、天拝山など、私たちもよく知る太宰府・博多の伝説が記され、興味深いものです。

特に太宰府天満宮がつくられた経過について、初めてまとまった形で表現しています。すなわち道真公が亡くなって後、崇禎(崇禎)がやまない(崇禎)ので、延喜五年(九〇五)味酒安行に勅(下)が下って、墓の上に飯屋を建てて造営が始まり、延喜十九年に完成したといういきさつが語られています。

この縁起は、元禄六年(一六九三)に黒田綱政の願により京都の菅原家が書写して奉納したもので、絵の入っていない字だけの形式です。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財<44>

木造舞楽面 3面  
(重要文化財)

うるしはく 漆箔 彩色 鎌倉時代  
観世音寺蔵

- 納曾利 <写真左上> 縦26.7cm 横20.0cm クス材
- 納曾利 <写真右上> 縦27.3cm 横20.6cm クス材
- 陵王 <写真下> 縦42.4cm 横27.0cm クス材

舞楽や伎楽は寺院の法会や外国の使節をもてなすために演じられました。伎楽は中国から伝えられた仮面音楽劇で、奈良時代を中心に盛んでした。

舞楽は舞を伴う古楽の総称で、日本古来のものや外国から伝来したものがあります。平安時代になると伎楽に代わってこれら舞楽の方が盛んになり、今日まで伝えられています。また音楽に重点を置いた雅楽という呼称もあります。

観世音寺にも、記録によると伎楽面や舞楽面があったようですが、現在では鎌倉時代に作られたこの三面が伝わるのみです。

陵王(羅陵王、蘭陵王)面は頭に竜がまたがり、緑、朱、金色もよく残り、当時の華やかさのしほれます。納曾利は陵王とともに舞楽の中では最も一般的なもので、二つは一組として演じられます。

三面とも応永十年(一四〇三)の修理銘が残っています。





題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



観世音寺裏の僧房跡

## 観世音寺境内及び子院跡

(国指定史跡)

観世音寺は、六六一年に朝倉橘広庭宮で亡くなった斉明天皇を追悼するために、息子の天智天皇の発願によって建てられた寺です。完成したのは約八十年後の奈良時代天平十八年(七四六)といわれています。

その規模は、講堂・金堂・五重塔・鐘楼・僧房などたくさん建物があり、建ち並んだ大寺院でした。

天平宝字五年(七六一)には、奈良の東大寺・下野(栃木県)の薬師寺とともに、日本で三方所しか置かれなかった戒壇院が開かれます。そのころの僧尼は戒壇院の試験(受戒)に合格しなければ正式の僧尼と認められないし、出世もできませんから、大変権威あるものでした。このことから観世音寺の重要さが知られます。

また中世には戒壇院も含めて多い時には四十九の子院(末寺)があったと伝えられ、観世音寺の北、四王寺山麓にかけて安養院跡、金光寺跡など、いくつかの子院推定地が点在し、史跡に指定されています。

太宰府の文化財

45

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



講堂

## 太宰府の文化財 ④⑥

### 観世音寺金堂及び講堂（県指定文化財）

江戸時代

前回書きましたように、盛時は壮大な伽藍を有した観世音寺でしたが、康平七年（一〇六四）の大火をはじめ再三の火災や暴風で、創建当時の建物は灰燼に帰してしまいました。その後、いく度か再建の努力がなされましたが、それも江戸時代初めの寛永七年（一六三〇）の大暴風雨で倒壊し、諸仏も破損しました。

そこでまず翌寛永八年、藩主黒田忠之が仮堂を建てて諸仏を安置しましたが、この仮堂が現在の金堂です。

講堂の再建は少し遅れて、元禄元年（一六八八）に藩主黒田光之や博多の豪商天王寺屋浦了夢一族等の努力によって完成しました。それが現在ある講堂ですが、壁は板壁であったものを昭和三十五年に今の白壁に直しています。

建物の平面規模は創建期に比べると金堂はほぼ変わらないようですが、講堂は約五分の二に縮小されています。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の

## 文化財

47

### 銅製鰐口一口

(県指定文化財)

径五八・七セ、厚さ一九・六セ

桃山時代 太宰府天満宮蔵

神社や寺に参詣したときに、お堂の軒下に下がる太い綱を引っ張って、グワァーンと扁平な鐘のようなものを打ち鳴らしたことがありませんか。それが鰐口です。

写真のように両脇から突き出た突起が「目」、その下から大きく裂けたような口が、鰐の口を思わせるのでこの名がついています。

天満宮にあるこの鰐口には銘文が刻まれ、それによると慶長五年（一六〇〇）二月に筑紫広門が寄進したものであることがわかります。

筑紫氏は御笠郡筑紫（現筑紫野市）を本拠としたことからこの名をもちますが、当時は筑後上妻郡（現在の八女市一带）の城主でした。広門は豊臣秀吉の家臣で、朝鮮の役にも軍功があり、関ヶ原の戦いでは西軍に属し、敗れました。この鰐口を奉納した時は、あたかも関ヶ原の戦いの七カ月前、世はまさに風雲急を告げるときでした。広門の胸中、すでに期するところがあったのでしょうか。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財 ④8

もくぞう じぞう ぼさつ  
**木造地蔵菩薩立像** (左)

像高136センチメートル 一木造(クスノキ)

はんか  
**木造地蔵菩薩半跏像** (右)

像高124センチメートル 一木造(クスノキ)

### 重要文化財 平安時代後期 観世音寺蔵

お地藏さんは、私たちにとって一番身近な仏様であり、赤いよだれ掛けをかけ、杖(錫杖という)を持って路傍に立つ姿は、その前に供えられた野の花と共に、私たちにとってなつかしいものの一つではないでしょうか。

少し難しくいうと、地藏菩薩は釈迦が亡くなってから五十六億七千万年の後に弥勒仏がこの世に出現するまでの無仏の時代、人々を救うために現われた仏であるといわれています。

その信仰は平安時代以降盛んになります。特に地獄に堕ちた者でも助けられるというので、庶民に広く信仰されました。

観世音寺のこの二像も、後世に修理された部分も多いのですが平安時代後期の作で、穏やかななかに地方色豊かな造形を感じさせています。

なお半跏像は、平安時代には作例が少なく、貴重なものです。この形は後に延命地藏として人々に親しまれていきます。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

## 太宰府の文化財

④9

### 石造七重塔

(相輪そうりんを除く) 一基  
(重要文化財)

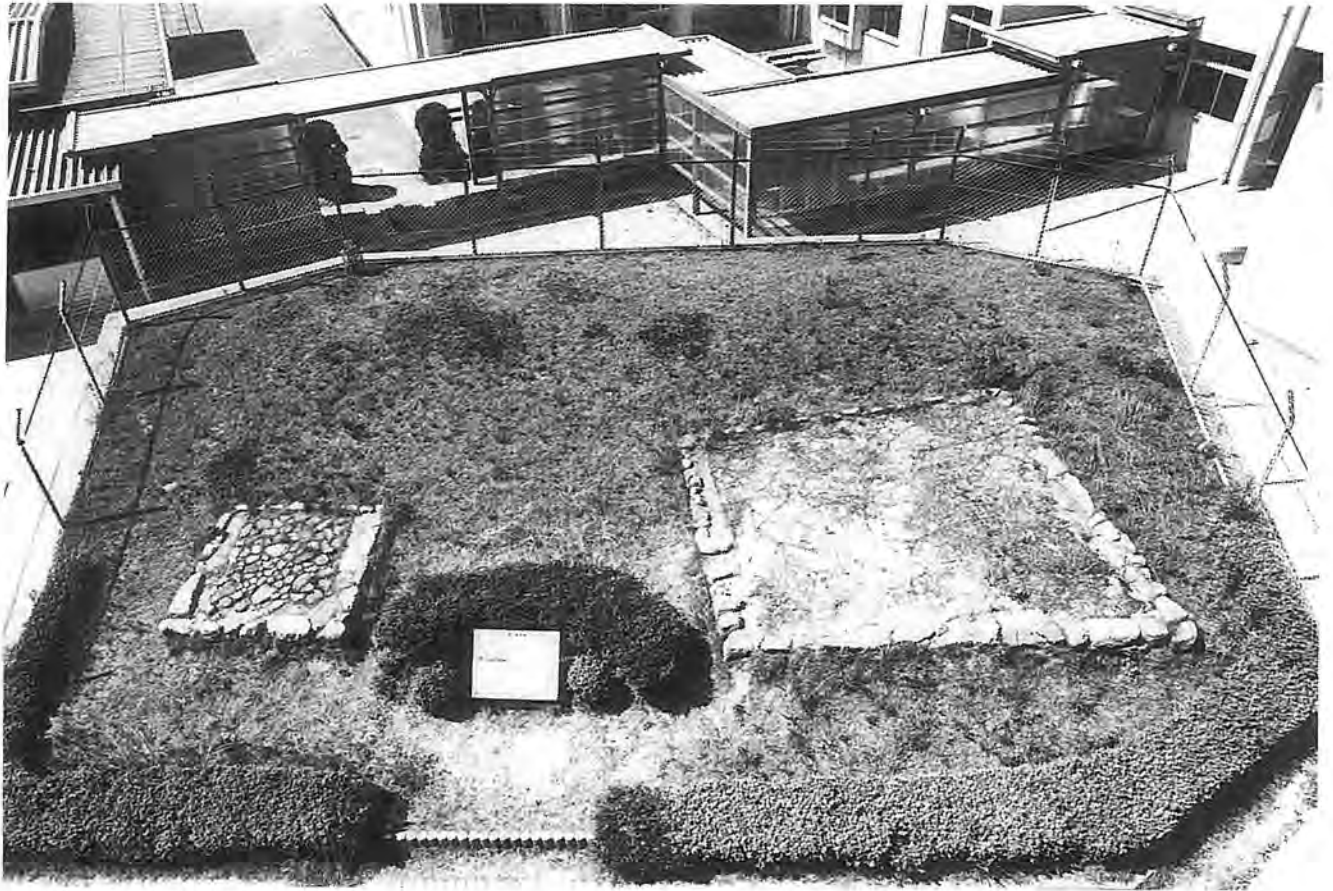
鎌倉時代後半  
大字南字般若寺所在  
西鉄二日市駅近く、桜町区内の  
丘の上に建っています。

石で造られた七重の塔で、台座の上の塔身には金剛界四仏こんごうがいしつぼつを表わす梵字ぼんじ(古いインドの文字)が刻まれています。その上に七層の笠が乗っており、高さは約三メートルです。鎌倉時代の半ば過ぎに造られたと推定されていますが、一番上の相輪は後世に補われたものです。

このあたりは小字般若寺で、昔般若寺という寺院があったといわれ、事実この七重塔の西方百餘ひゃくじゆには奈良時代の塔跡があり、塔の心礎こころいしも残っています。しかし、般若寺についての詳しい実体はまだはつきりわかっていず、今後の調査が期待されます。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



## 太宰府の文化財 ⑤0

### 宮ノ本遺跡

(県指定史跡)

市の南西部、向佐野区の太宰府西小学校敷地内にあります。

昭和五十四年秋、同小の建設工事中に、古墳六基（五世紀後半）、窯跡三基（七世紀後半）、墳墓四基（平安時代）、住居跡一基（七世紀後半以前）その他が発掘されました。中でも墳墓の一つから出土した一枚の鉛板は、日本の考古学上第一級の発見でした。

それは「買地券」と呼ばれるもので、土地の神から墓地を買ったという証文です。買地券は中国の習俗で、日本ではそれまで確実な発見例はありませんでした。

買地券には、死者の氏名、死亡年月日、墓地の場所、代価などが

記されますが、宮ノ本のもは残念ながら死者の名や死亡日の部分は欠けていて不明です。

残り部分からは「(死者の)息子の好雄は墓地として宅より〇〇方角の静寂な所に土地を買い、その値は銀二十五文、歛一口、絹五尺などであった。このように浄地を墓としたので、霊は安らかに眠ることができるだろうし、子々孫々に至るまで繁栄をもちたらしめたい」といったことが判読できました。

現在、買地券を出土した墳墓を中心に、遺跡の一部が校舎の間に保存されています。



買地券